

平成新山フィールドミュージアム拠点施設に関する観光動態調査

長崎大学大学院 学生会員 ○末吉龍也 長崎県 正会員 其田智洋
長崎大学工学部 フェロー 高橋和雄 長崎大学工学部 正会員 中村聖三

1. まえがき

雲仙普賢岳の火山災害を受けた島原市と深江町では、復旧・復興事業が順調に進み、火山観光・火山学習体験の場となる雲仙岳災害記念館、道の駅『みずなし本陣ふかえ』（土石流被災家屋保存公園）、大野木場砂防みらい館および平成新山ネイチャーセンターなどの拠点が整備されている。これらの拠点と従来の観光施設である島原城、武家屋敷などとの連携を図り、順調な入込み客を宿泊に結びつけることが、地域の活性化に不可欠である。そこで、島原地域において、地域の行政、住民一体となって、平成新山の景色や災害遺構、火山関係の施設などをまるごと一つのフィールドミュージアムとして構想し、施設間のネットワーク化を図っている。本研究では、平成 15 年度の調査¹⁾を踏まえ、この構想の中核となる 4 施設、旧来型の観光施設の代表である島原城および平成 16 年に新しく雲仙天草国立公園地域にオープンした雲仙お山の情報館において観光客アンケートを実施し、観光動態、構想の評価、施設の満足度、観光資源としての評価などを分析する。

2. 調査概要

アンケート調査は平成 16 年 11 月 6、7 日の両日に島原市と深江町の雲仙岳災害記念館、道の駅『みずなし本陣ふかえ』（土石流被災家屋保存公園）、大野木場砂防みらい館（大野木場小学校被災校舎）、平成新山ネイチャーセンター、旧来の観光施設の代表である島原城および平成 16 年に新しく雲仙天草国立公園地域にオープンした雲仙お山の情報館の 6 施設で実施した。施設の見学を終えた観光客を対象に、面談に方式によってアンケートの回答を得た。6 施設の回答者数は、それぞれ 91 人、112 人、50 人、52 人、78 および 101 人の計 484 人である。

3. 観光動態調査結果

3.1 回答者属性

居住地についてみると、「福岡県」（26.1%）、「長崎県」（18.3%）、「熊本県」（17.8%）が多く、九州 7 県で 80.0% を占めている。雲仙岳災害記念館では、「福岡県」および「熊本県」からの観光客が多い。また、道の駅、大野木場砂防みらい館および島原城は、「福岡県」からの観光客が多い。平成新山ネイチャーセンターと雲仙お山の情報館では、「長崎県」の割合が高い。比較的新しい施設であるため、県外の観光客に知られていないようである。

3.2 観光客の行動

(1) 旅行の宿泊日数 旅行の宿泊日数をみると、「1 泊」が 56.4% と全体の半数以上を占める。次いで「日帰り」（27.4%）、「2 泊」（9.4%）、「3 泊以上」（6.3%）となっている。また、「旅行で宿泊する」と回答した観光客に島原市内での宿泊日数について聞いたところ、「宿泊しない」が 58.5% と半数以上を占めている。「宿泊」は 40% 程度であり通過型の観光行動パターンが見られる。

(2) 旅行コース 旅行のコースを聞いたところ、「雲仙温泉

街（雲仙仁田峠を含む）」が 57.2%、島原市内の観光客は「雲仙温泉街」と結びつきが強い。つまり、宿泊地が「雲仙温泉街」で、行きや帰りに島原に立ち寄っていることがわかる。「長崎市内（グラバー園、平和公園など）」（18.8%）、「小浜温泉」（16.4%）、「熊本（阿蘇、熊本城など）」（10.2%）、「ハウステンボス」（2.3%）となっている。「ハウステンボス」との結びつきは小さい。九州圏外の観光客では、「長崎市内」も旅行コースに入っている割合が高い。

(3) 島原市内での旅行コース 島原市内での旅行コースについてみると、火山関係施設の観光客の 35%～42% は「島原城」に立ち寄っており、「島原城」との結びつきはできつつある。同じく、「島原城」の観光客は、「武家屋敷」、「道の駅」および「雲仙岳災害記念館」には、その 35%～40% が立ち寄っている。しかし、「雲仙岳災害記念館」、「道の

表 - 1 島原市内での旅行コース(複数回答)

項 目	雲仙岳災害 記念館		道の駅		大野木場 砂防みらい館		平成新山 ネイチャーセンター		島原城	
	(N=91)		(N=112)		(N=50)		(N=52)		(N=78)	
		%		%		%		%		%
島原城	35	38.5	47	42.0	21	42.0	18	34.6	-	-
武家屋敷	20	22.0	28	25.0	13	26.0	11	21.2	34	43.6
白土湖	1	1.1	5	4.5	1	2.0	3	5.8	12	15.4
雲仙岳災害記念館	-	-	24	21.4	15	30.0	24	46.2	31	39.7
道の駅	36	39.6	-	-	11	22.0	30	57.7	27	34.6
大野木場 砂防みらい館	7	7.7	6	5.4	-	-	6	11.5	3	3.8
平成新山 ネイチャーセンター	3	3.3	5	4.5	2	4.0	-	-	2	2.6
その他	5	5.5	8	7.1	2	4.0	4	7.7	1	1.3

駅」および「島原城」の観光客は、「大野木場砂防みらい館」および「平成新山ネイチャーセンター」には立ち寄っていない。また、「大野木場砂防みらい館」および「平成新山ネイチャーセンター」の観光客は、「島原城」、「雲仙岳災害記念館」および「道の駅」に立ち寄っている(表-1)。

(4) 今回の旅行の目的 今回の旅行の目的をみると、「島原の観光が主目的」が42.3%と最も多い。次いで「いくつか回る観光地の一つ」(37.6%)、「通過点であったが、時間があつたため」(8.4%)となっている。「雲仙岳災害記念館」および「大野木場砂防みらい館」は、「島原の観光が主目的」と回答した割合が高い。一方、「道の駅」は、「いくつか回る観光地の一つ」と回答した割合が高い。長崎県、福岡県、熊本県などの近県の観光客は、「島原の観光が主目的」が多い。遠くから来られた観光客、「いくつか回る観光地の一つ」が多い。

(4) 今回の旅行の情報源 今回の旅行のきっかけとなった情報源としては、「友人・知人に勧められて」とする口コミが27.9%とトップである。次いで「雑誌・旅行ガイドブック」が24.0%、「観光パンフレット」が17.5%となっている。「友人・知人に勧められて」は地域に関係なく多いことは注目に値する。また、情報源から満足度をみると、「十分得られた」と「だいたい得られた」の合計が78.6%を占めており、満足度は高い。

(5) 移動手段 移動手段としては、「自家用車」が62.9%と最も多い。次いで、「観光バス」や「フェリー」となっている。陸上の公共機関の利用者はきわめて少ない。

33 島原地域に必要な整備

島原地域に必要な整備としては、「観光案内板の整備」が33.4%と最も多い。「大野木場砂防みらい館」、「平成新山ネイチャーセンター」および「島原城」では、半数近くに達している。「平成新山ネイチャーセンター」では、整備要望が他の施設より多い。平成新山フィールドミュージアム構想で一部実施されている「市内観光地を巡る循環バス、乗り合いタクシーの運行」のニーズは8%程度である。その他の内容では「電車・バス」(公共交通)、「バリアフリー」、「食事・遊ぶところ」、「宿泊施設」などが挙げられている。

34 平成新山フィールドミュージアム構想の評価

(1) 火山学習施設の見学歴 復興事業で整備された施設において、これまでに見学したことがある他の施設としては、「雲仙岳災害記念館」と「道の駅」の割合が高いが、「大野木場砂防みらい館」と「平成新山ネイチャーセンター」の割合はきわめて少ない。また、各施設の満足度について見ると、「十分得られた」と「だいたい得られた」を合計すると、各施設とも3分の2を超えており、満足度は高いといえる(図-1)。

(2) 構想の周知状況 構想の周知状況については「良く知っていた」(8.4%)、「だいたい知っていた」(8.6%)と約17.0%が「知っていた」と回答している(図-2)。このように、周知状況はまだ低い。居住地が長崎県から離れていくほど「知っていた」が少なくなっている。

(3) 構想を知ってもらう方法 「テレビ・ラジオを使用したコマーシャル」が60.8%と最も多い。次いで、「新聞・雑誌による紹介」(41.3%)、「平成新山フィールドミュージアムマップのインターネット版の作成」(29.2%)が多い。九州圏外は、「平成新山フィールドミュージアムマップのインターネット版の作成」が九州圏内に比べて多い。島原市に来る前の情報が重要視されており、島原に来てからの情報(パンフレット、観光案内板、道路案内板)よりも多い。

4 まとめ

今回のアンケート調査をもとにした構想に対する提言については講演時に発表する。

参考文献 1) 末吉龍也、高橋和雄、中村聖三、其田智洋：平成新山フィールドミュージアム構想の推進に関する観光客アンケート調査 第59回土木学会年次学術講演会講演概要集、-186 2004.9

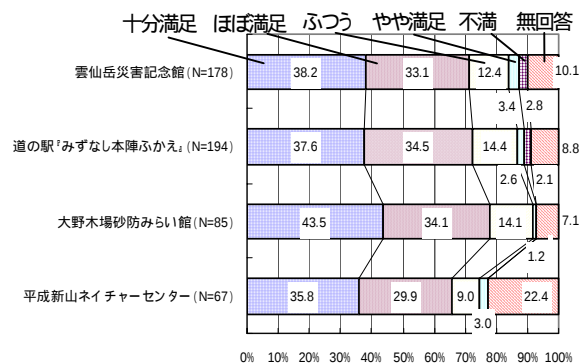


図-1 施設の満足度

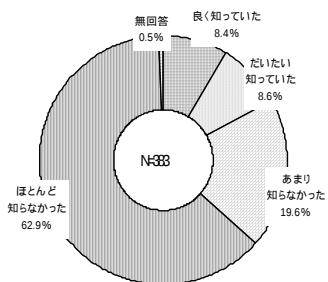


図-2 構想の周知状況